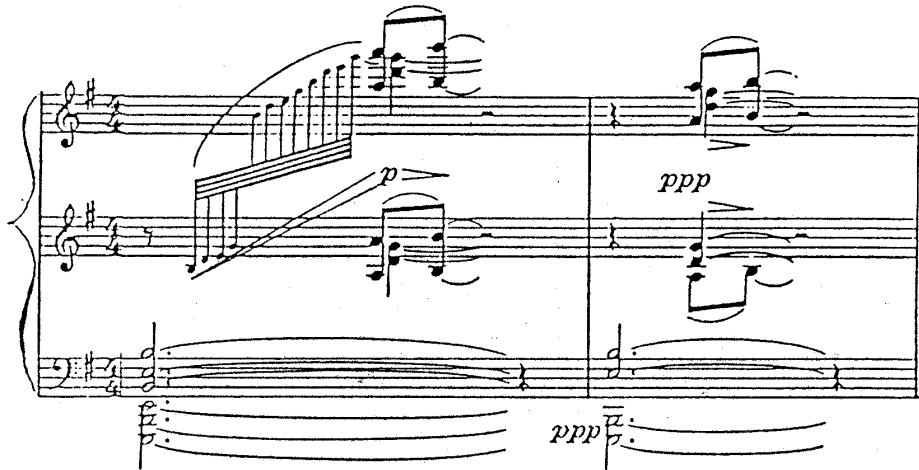


第7詩句から第10詩句までは、不協和音を徐々に減し、動きも増々ゆるやかに拍子も3, 4, 2, 4と変化させながら、光線を *Se trainer* 這せるように下降歌わせ、伴奏は *Mi* の基音上に、五音音階の拡大したアポジアテュールを形づくるアルペジオで、戦慄しながら消滅する（譜例12）。

譜例12



Ⅲ お わ り に

ドビッシーの「ため息」は、*mon âme* の音調律動が要素となって、反復拡大され溶け合い変容して統一され、優しさと暖かさを醸し出し、ラヴェルのそれは詩を半節（5詩句）ずつに分け、造形的に明確に構成されている。

両者とも第6, 7詩句に精緻で繊細な技巧を用いて、機能と声とを解放し、調性をあい昧にし、和音を断片的に反復して響きによる耳の色彩を重視した。丁度印象派の画家たちが構図と遠近法を排し、「色と光」を重視したように。

参 考 文 献

- ・「マラルメ詩集」加藤美雄訳 昭森社 1962年
- ・「ステファヌ・マラルメ詩集」鈴木信太郎・南條彰宏訳 世界文学大系43 筑摩書房 昭和37年
- ・「フランス文学辞典」日本フランス語フランス文学会編 白水社 1974年
- ・「フランス詩法」下 鈴木信太郎著 白水社 1970年
- ・西洋美術史 吉川逸治監修 美術出版社 1977年
- ・Claud Debussy and the Poets ARTHUR B. WEHK
UNIVERSITY OF CALIFORNIA London 1976年
- ・Claud Debussy LETTRES 1884-1918
Réunies et présentées par FRANÇOIS LESURE
HERMANN Paris 1980年
- ・Sur L'INTERPRÉTATION des mélodies CLAUDE DEBUSSY
JANE BATHORI LES EDITIONS OUVRIERES PARIS 1953年
- ・「ラヴェル」Leon, Georges 北原道彦, 天羽均共訳 音楽之友社 昭和49年
- ・「ラヴェルと私たち」Jourdan-Morhange, Helen 安川寿子・嘉乃海隆子共訳 音楽之友社 昭和43年
- ・Ravél Myers, Rollo H Gerald Duckworth London 1960年
- ・楽譜は Trois Poèmes de Stéphane Mallarmé, DURAND PARIS
ドビッシーは1964版 ラヴェルは A, 1969年版

譜例9

Et vers le ciel er . rant de ton œil

pp

左手は la を通って Mi まで下降し、空間を拡げ言葉通り「ひたすらに」, 「白噴水」を「蒼空の方に」「ため息」させる(譜例10)。

譜例10

. li que, Fi . . de le, un blanc jet

pp

*Ad jusqu'à **

しかし伴奏は、第5, 6詩句の行間で、突然場面が変化し、人間の内面を見つめるかのように響く。その効果は複雑な記譜法の工夫—臨時記号の多用による増減音程、不協和音の反復が調性をあい昧にしていることによる。特にこの部分は豊かな色彩を添えて、彼独特の不思議な雰囲気を出している(譜例11)

譜例11

Vers l'A . zur at . ten .

mp

同詩句の sur l'eau morte 溜んだ水面にの伴奏は、低音域で暗く暈された効果、Ré Hémicorde 全音音階を用い、第9詩句後半は、Ut 五音音階を用い、第10詩句では伴奏部に Si \flat 五音音階を混ぜ、歌の部に4、5度音程を多用して、弱々しい long rayon 長い光線をゆっくり伸ばすように、前奏部テーマを効果的に重ねて響かせ、蒼空に熱望を残し消える（譜例7）

譜例7

一方ラヴェルの歌曲作品は、同年までに未刊を含めておよそ30曲残し、彼独自のスタイルが表われた時期（1900年から10年間）に、Shéhérazade「シェラザード」(1903), Histoires naturelles「博物誌」(1906), Cinq mélodies populaires grecques「五つのギリシャ民謡」(1907), Sept chansons populaires「七つの民謡」(1910)がある。

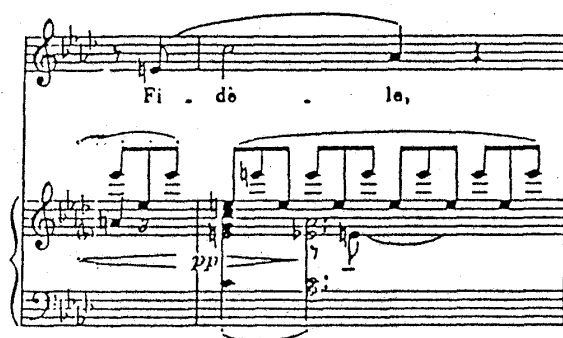
曲は♩=40のゆったりした速度、嬰（#）記号1つ、四分の4拍子からなる。五音音階—Mi sol la si réの音形（譜例8）が、秋の黄日光を表わす繊細な輝きと sourdine ひそやかな PPPで始まる。

譜例8

その音形は7小節（28拍）続き、伴奏右手は更に第3詩句まで続くが、左手は揺れさ迷い始め（譜例9）、第4詩句から右手は音形を残しながらも、第5詩句の Fidèleへ四分音符の声部が加わり、ゆったり fa#まで上行して旋律を奏でる。

第4詩句の Comme のようにからは, jardin mélancolique 憂愁の庭を背景に, ため息とも噴水とも思われる, 五音音階で構成される和音と mi の跳躍上行下降が描かれる。第5詩句の語 Fidèle ひたすらには, 更に譜例2の音調を短6度音程に拡げ, 伴奏の長3和音 Ut が増3和音 Lab に長3度下降し強調する(譜例4)。

譜例4



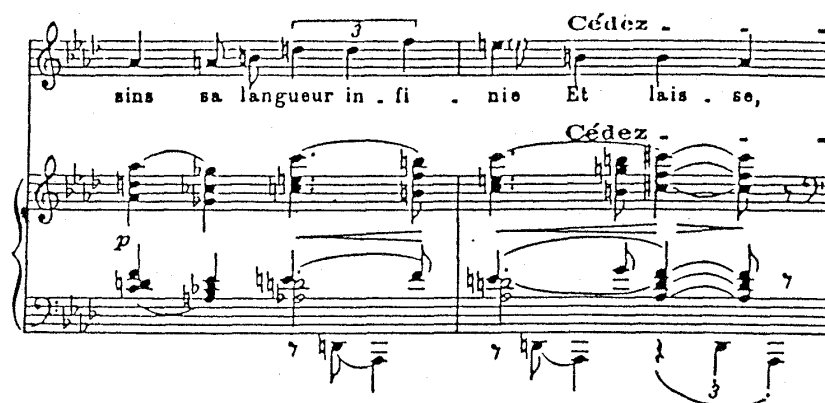
第6詩句は伴奏に譜例2と Fidèle の音調を重ねるように, La \flat 五音音階に長3和音と短3和音を混ぜ合せ, 色彩的にしながら歌にため息させる(譜例5)。

譜例5



更に第7詩句は伴奏の基音 La \flat 上に七の和音の半音上行下降で, sa langueur infinie はてなきもの憂さ, 熱望と諦めを反復強調させながら(譜例6), 歌は第8詩句の語 Et laisse させるで下降行する。

譜例6

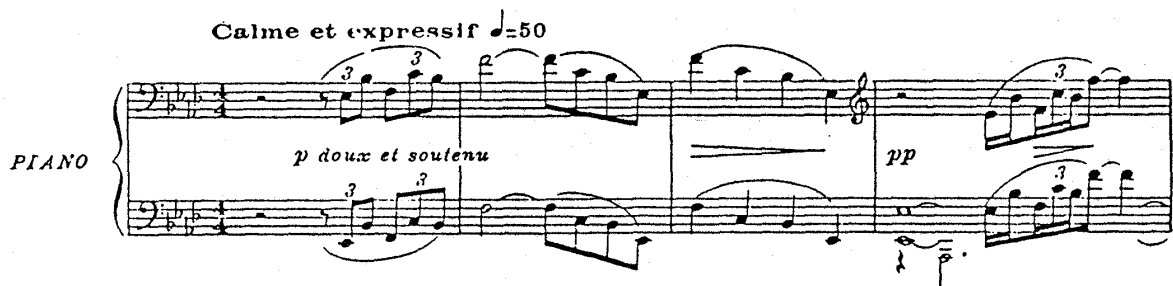


数韻を重視したボードレール、ヴェルレーヌの音調を更に一步進めて、動詞接続詞従属節の省略を大胆に改革し、「凝った文体」Préciosité を予想させる。

ドビッシーはこの詩を作曲するまでに、すでにおよそ50歌曲を残し、円熟期（1900～10年頃）には、「みやびな宴・第Ⅱ集」Fêtes galantes II, 「フランスの三つの歌」Trois Chansons de France (1904), 「恋人たちの散歩道」Le Promenoir des deux amants, 「ヴィヨンの三つの譚歌」Trois Ballades de François Villon (1904-10) がある。

曲は、静かなそして表情豊かな速度 ♩=50で、変（b）記号4つ、四分の4拍子を中心に2, 3, 5拍子に変わる。前奏部6小節は、長短調でない音列, Pentatonic 五音音階-La^b si^b ut mi^b fa で組織される（譜例1）。

譜例 1



譜例 2



前奏部は第1詩句の語 mon âme 私の魂（譜例2）の律動音調を拡張している。上行が aspiration 熱望を，下降が resignation 諦めを暗示し，この二つが組合わされて，詩の題である「ため息」を想起させる。時にこれらは拡張反復されたり，断片に縮小されたりすることによって，旋律や和音が彩られ変容され，彼独自の作品となっている。例えば第1詩句から第3詩へ向って上行し，そこから第4詩句の語 monte たちのぼるへ半音で躊躇しながら，errant さまようように不安定な Mi Pentatonic で下降する。このフレーズの中で，第2詩句の伴奏に減七の和音 si^bと判断されるを La^bに長2度平行下降させ，断片的に諦めを垣間みさせる（譜例3）。

譜例 3



し探求して、語や文体を暗示的に用いた作品に、更に第2に画家たち及びその作品による影響、すなわち印象派ピサロ（1831-1903）、シスレ（1839-99）、モネ（1840-1926）、ルノワール（1841-1917）の戸外での仕事、時々刻々に変化する光と色を瞬時にカンバスに描いた繊細で色彩豊かな作品に、印象派後期セザンヌ（1839-1906）、ルドン（1840-1916）、ゴッギャン（1848-1901）、ゴッ木（1853-90）、スーラ（1859-1906）による、眼に見える現実の世界を通して、その奥にある別の世界を描いた作品に、音楽家たちのイメージが音に喚起させられたといえる。なおこれらの芸術作品が生れた背景には「よき時代」Belle époque と呼ばれた通り、4回に渡る万国博覧（1855, 67, 78, 89, 年）、7回の印象派絵画展（1874, 76, 77, 79, 80, 81, 86年）、及び浮世絵展（1890年）の影響も忘れてはなるまい。このように成熟した文化の時代にあつて、偶然にもマラルメの同じ2つの詩「ため息」Soupirと「むなしい願い」Placet futile が二人の音楽家ドビッシーとラヴェルによって、同じ年（1913）に作曲された。同じ詩をこの二人が夫々どのように作品として、「詩と音楽」を融合したか、類似点と相違点を分析してみる。

II, マラルメの詩「ため息」によるドビッシーとラヴェルの歌曲について

Soupir

た め 息

Stephane Mallarmé

ステファーン・マラルメ

Mon âme vers ton front où rêve, ô calme soeur,	私の魂は君の額の方で夢みる、おお穏やかな妹よ、
Un automne jonché de taches de rousseur	まき散らされた秋の朱色の斑紋
Et vers le ciel errant de ton oeil angélique	そして蒼空の方にさまよう君の天使のような瞳
Monte, comme dans un jardin mélancolique,	立ちのぼる、憂愁な庭に、
Fidèle, un blanc jet d'eau soupire vers l'Azur!	ひたすらに、白噴水のため息をつく蒼空の方に！
Vers l'Azur attendri d'Octobre pâle et pur	その蒼空の方に優しい十月の青白く澄み
Qui mire aux grands bassins sa longueur infinie	映せり大泉水のはてなきもの憂さ
Et laisse, sur l'eau morte où la fauve agonie	溜んだ水面に淡黄褐色の苦悩
Des feuilles erre au vent et creuse un froid sillon,	葉の風にさまよい、冷めたい波紋を刻む、
Se traîner le soleil jaune d'un long rayon.	這わせる黄落日の長い光線。

この作品は1864年、トゥルノンにて他九篇と共に作られた後、「現代高踏詩集」Parnasse Contemporain 1866. 5. 12. 刊行に発表された。

この詩は10詩句からなり、2詩句ずつの「連続平韻」rime plate, aa bb cc dd ee（男性韻、女性韻）をもつ、12音綴 Alexandrins の韻律である。特徴は、各詩句また脚韻に半階音 Assonance 母音 [o] [ɔ] [ɔ̃] が配置され、更に前置詞「の方に」vers が全詩句の4詩句に用いられ詩の構成を緻密にし、音調を豊かに整えている。すなわち「蒼空」Azur の視野を順次遠くへ移動させながら、秋の夢想としたもの憂さ「ため息」を象徴的に醸し出す。この作品がマラルメ初期とはいえ、フランス詩の主流である12音綴の安定した半句切りのみとせず、また語の倒置、句跨、奇

ドビッシーとラヴェルの歌曲について

— マラルメの詩「ため息」による —

下 山 進

Sur les Melodies de DEBUSSY ET de RAVÉL

Par le SOUPIR, un poème de MALLARMÉ

SUSUMU SHIMOYAMA

L'Invitation au Voyage

Mon enfant, ma soeur,

Songe à la douceur

D'aller là-bas vivre ensemble,

.....

Là, tout n'est qu'ordre et beauté,

Luxe, calme et volupté.

.....

Poésie de Ch. BAUDELAIRE

I は じ め に

近代フランス歌曲Mélodieは、デュパルクの「旅への誘い」L'invitation au voyage(1871年)からフォーレの「幻想の水平線」L'horizon chimérique(1922年)のおよそ50年間に広く他分野の芸術家たちおよび芸術作品との「交感」Correspondanceによって生れたといえる。この50年間に、精緻な洗練された歌曲作品を残した音楽家には、mélodieの創始者といわれるグノー(1818-93)を初め、フランク(1822-90)、ラロ(1823-92)、S. サーンズ(1835-1921)、ビゼー(1838-95)、シャブリエ(1841-94)、マスネー(1842-1912)、フォーレ(1845-1924)、デュパルク(1848-1933)、ダンディ(1851-1931)、ショーソン(1855-99)、ドビッシー(1862-1918)、デュカス(1865-1935)、ルーセル(1869-1937)、シュミット(1870-1958)、ラヴェル(1875-1937)、カプレ(1879-1925)の名が上げられる。彼らの歌曲分野における活躍は、先ず第1に詩人たち及びその作品の影響にあった。すなわち19世紀後半の歌曲作品には高踏派ゴーチエ(1811-72)、リール(1818-94)、バンヴィル(1823-91)、リラダン(1838-89)、コペー(1842-1908)による、自己告発や感情吐露を嫌って、語を厳格に選び形式美を尊重した作品に、20世紀前半のそれには象徴派ボードレー(1821-67)、マラルメ(1842-98)、ヴェルレーヌ(1844-96)、ランボー(1854-91)、サマン(1858-1900)、レニエ(1864-1936)による、人間の内面に興味を示